第三百七十回　青葉会

平成二十九年正月五日（木）　吉例初芝居総見・歌舞伎座昼之部
一月二十六日（木）　初句会　午後六時―八時半　文京区民センター

〈顧問〉☆川合万里子　先生
〈選者〉◎川口孤舟
〈出席者〉伊賀山そらお　今井紀久男　大林猛　柿崎忠彦　川口孤舟　久米五郎太　小西弘子
朱牟田恵洲　土谷堂哉　豊田ゆたか　中野一灯　山内天牛
小早健介　後藤保明　古田昇　星田啓子　宮内規雄　山崎亜也　山田けいこ　渡邊盛雄
赤田堅　安部眞希子　楠田彦十　在間千恵　庄司龍平　高橋敏郎　早川允章　福島正明
村田くに子　山田けいこ　山本三恵

〈投句〉
〈紙上選句〉

《互選句》

七点
☆寒風に向かひ干さるる柔道着　孤舟（眞・万・恵・龍・堂・允・三）
◎みちのくの雪載せて着く夜行バス　一灯（忠・弘・彦・千・龍・ゆ・く）

六点
◎水洟の子のすべり台きりもなし　そらお（眞・孤・弘・恵・堂・天）
襟巻をくるりと回し話絶つ　弘子（眞・忠・彦・堂・允・く）

五点
雪降れば背の雪払ふ母憶ふ　忠彦（そ・猛・龍・敏・灯）
☆分断に揺らぐ大地や雪なだれ　健介（堅・紀・万・五・灯）
（☆…分断の「だ」大地の「だ」雪なだれの「だ」、「だ」音の重なりがリズミカルで佳い）
（天…「雪」は不要、「なだれ」は春の季語）

四点
☆◎妻恋の草田男憶ふ寒夜哉　恵洲（万・孤・五・弘・堂）
◎鱈漁の荒ぶる沖や海難碑　一灯（そ・孤・弘・恵・允）
石段の高さにひるむ初詣　そらお（堅・猛・ゆ・正）
☆二人暮らし手抜きの増えし年用意　仝（堅・紀・万・敏）
寒風や飛砂頬を刺す拉致の浜　紀久男（弘・灯・允・三）
☆がん治療方針決まり年新た　忠彦（そ・眞・万・敏）
冬の坂海の切れ端輝やけり　堂哉（紀・弘・恵・灯）
（紀…中七の表現が素晴らしい）
☆ケイタイに干支の根付や新成人　一灯（眞・万・恵・龍）
（☆→「新成人干支の根付を携帯に」）
凡庸に生きて七癖日向ぼこ　盛雄（ゆ・く・天・三）

三点
一年の短さ嘆く柚子湯かな　猛（忠・孤・敏）
本人の字でない賀状病むを知る　忠彦（猛・ゆ・正）
咲くまでは孤独でありぬ寒牡丹　孤舟（堅・ゆ・三）
なぜこんな羽目に鮟鱇の吊し切り　仝（忠・堂・灯）
☆牛蒡抱き花びら餅の薄紅　弘子（紀・万・千）
☆隆々と身を張りつめる寒の鯉　仝（猛・万・五）
（☆→「寒鯉の身を隆々と張りつめて」）
正月や一句も成せず豆のパン　仝（忠・彦・五）
逞しく老いて女の初地蔵　仝（彦・灯・天）
◎涙腺は意に随はず冬銀河　恵洲（孤・五・正）
☆母百寿孫に背負はれ初詣　堂哉（眞・万・天）
（☆…百歳と思われますが、詩としては白寿の方が面白い。「は」音の重なりにもリズム感がある）
◎たをやかに春の海弾く琴始　一灯（猛・孤・く）
（☆…「春の海」＝宮城道雄作曲の箏と尺八の二重奏の作品名）
（☆→「たをやかに「春の海」弾く琴始」）
☆声澄みて少年剣士冬朝　けいこ（万・彦・五）
（☆→「冬の朝少年剣士の声澄みて」）
独り居の極楽浄土掘り炬燵　盛雄（そ・ゆ・允）

二点

☆ 播磨屋に満場ほれぼれ初芝居　紀久男（万・敏）
（吉右衛門の「沼津」呉服屋十兵衛）
☆ 大寒や畏友の愛した酒献杯す　紀久男（堅・万）
（蕎麦屋の松翁で恭延さん偲ぶ会）
（☆→「大寒や畏友の愛せし酒献杯」）
☆ 薄墨の滲みし供物寒の夜　五郎太（万・三）
キオスクのマスクの人よりマスク買ふ　恵洲（弘・千）
☆ 笑顔もて受話器のリレー御慶かな　堂哉（万・忠）
吉右衛門観し夜の月のことに冴ゆ　ゆたか（紀・三）
☆ 荒れ模様正月相撲に母騒ぐ　啓子（そ・万）
（☆→「母騒ぐ正月相撲の荒れ模様」）
☆◎初句会ひそかに闘志燃やしけり　規雄（万・孤）
☆ 初雪や妻の遺影に声掛くる　仝（万・堂）
（☆→下五「声を掛け」）
初硯メールの連句書きとめり　亜也（千・龍）
☆ 読み初めにプーチン選びウォトカ舐む　仝（紀・万）
（☆→「読み初めやプーチン選びウォッカ舐め」）
☆ 師逝くと大みそかの朝庭を掃く　けいこ（紀・万）
（☆→「師逝きし大晦日の朝庭を掃く」）
今日買ひしスキー服着た孫来たる　天牛（猛・龍）
☆ 書初めは平假名で書くのし袋　仝（万・彦）
（☆→「書初めや平仮名で書く熨斗袋」）
海老蔵の「義賢（よしかた）最期」

一点

☆ 殺陣凄まじ孫息を呑む初芝居　紀久男（万）
白鳥五千未明の潟に睦みをり　仝（允）
☆ 紅白の印象薄く年暮れぬ　猛（万）
元朝や期するものあり空見上ぐ　仝（堅）
笑はせて泣かす初芸吉右衛門　忠彦（敏）
詠ふとは無垢になること寒昴　孤舟（天）
初釜や皆で布袋の腹眺め　五郎太（天）
初場所や回しの色まで鮮やかに　保明（正）
☆ 苦節経て日の下開山春来たる　健介（万）
底冷えや遺影の部屋の灯を消しぬ　恵洲（そ）
◎ 駄句ばかり並ぶ句帖や年の果て　仝（孤）
先ず大根大根で〆酒二合　堂哉（千）
寒月のおのが影踏み露地歩む　ゆたか（く）
☆ 李白の詩口ずさみつつ初湯かな　仝（万）
◎ 初春を寿ぐダイヤモンド富士　昇（孤）
沖縄につなぐ希望や去年今年　仝（紀）
初夢の朝めでたしと季語探る　啓子（紀）
紅梅や一輪ふわりと咲く朝　仝（千）
初声や空を切り裂き陽に届く　仝（紀）
破魔矢振り仮面ライダー正義の子　けいこ（く）
風花へ脳にまっすぐ飛び込む子　仝（正）
宮城を眼下に昼餉冬霞　仝（紀）
二人だけ離島（しま）の親娘（おやこ）のお正月　仝（正）
豊葦原の寒禽黙す千秋楽　盛雄（紀）

●次回青葉会
二月二十三日（木）　午後五時半～八時半　文京区民センター
△当季雑詠各自五句　投句二句

以上文責　紀久男

平成二十九年一月句会報

一　歌舞伎座・昼の部総見

豊田御夫妻ら十一名参加。お目当ては「沼津」のご満足されておりました。　はねてからいつもの蕎麦の田中屋い出来で皆さん圧倒された感があり、ご満足されたイメージの愛之助の確かな芸（舞踊「大津絵道（松屋の八階）。芝居のこと・・・ちゃらちゃらに打込む吉右衛門の至芸と雀右衛門（お米）歌六（成寺」で五変化）、今月の出番「沼津」一役のみのご葬儀のことなど話題にし乍ら舌鼓を打ちました。平作）のアンサンブルの良さ等。そして恭延さん呉服屋十兵衛役の吉右衛門。期待に違わず素晴らし

二　初句会

久しぶりの堂哉さんら十二名出席。投句はモスクワ出張帰りのご挨拶に顔出しされた亜也さんら八名。万里子先生ご寄贈の「井の頭煎餅」と「吉祥羊羹」（阿佐ヶ谷）、弘子さんからまい泉のカツサンド。天牛さんの美々卯の凍結酒「福寿」（灘）、忠彦さんの鉄火巻と純吟原酒「福寿」、小生の純吟「〆張鶴・純」と純吟「三重大学」（津の平松さんの友人より）、缶ビールを賞味しつつ猛さんの進行役で、ぴったり八時半に終了。ご覧のように、一灯さん、そらおさんが好成績でした。　二次会は先月同様焼鳥屋「鳥兆」へ。恵洲さん堂哉さんらは別行動でした。回覧は先生から年末に頂戴した一筆箋、恭延さんの「合同句集」発行以降の入選遺句（忠彦さんがまとめられたもの）と二〇一五年七月句会でのスナップ（啓子さん撮影）、二〇一六年五月二日付、投句一筆箋。そして三月歌舞伎座のチラシ。尚、堂哉さん、亜也さんからのお土産は来月回しになりましたので、悪しからずねがいます。

三　関係者近詠

母校訪ふ紅葉黄葉の空青し　万里子　全
君が代を歌ふ横綱優勝す　全
枯蔓を引くや隣家の雀騒　全
機影冷え墓地への轟音曇天に　全
初雪が大雪となり垂（しだ）る夜　全
お向ひのサンタ像灯り待降節　全
父と子のキャ〽ル朗々聖夜更く　全
一汁で足りて冬至の夫の留守　眞希子
着ぶくれてミニスカートに追ひ越さる　全
待降節一人の作家を絞り読む　全
鷹すいと隠るる現るる甲斐の山　弘子
山住みの命の橋へ紅葉降る　全
中華屋の大円卓へ七五三　全
雪だねと言ひ合ふひとり逝きにけり　全
菊枕閉ざされし夢幾そ許　青史
妻の好きな熟柿を掬ひやり泪（なみだ）　全
輝を主夫の勲章とてわらふ　全
日向ぼこその日の写真あれこれと　全
泣くことは贖罪ならぬ冬の雨　全
お目当ての仁左の綱豊口跡冴ゆ　紀久男
じっくりと人情噺雪催ひ　全

―　「萬緑」　―　二月号

のけぞれる芸妓の喉（のんど）冬座敷　允章
熱燗をお酌する手の白さかな　全
熱燗や踊る芸妓の目線追ふ　大手明男
古町や雁木伝ひに鍋茶屋へ　紀久男
年の瀬や散財せんと茶屋遊び　全

鍋茶屋に寒ざらひせるおもてなし　紀久男
冬ざれの渚にさかまく怒濤かな　大手明男
数千の水鳥蠢（うごめ）く夜明前　允章
連れ立ちて白鳥翔べり明けの空　全
次々に白鳥家族潟を翔つ　紀久男
笹鳴きのひとつ来てゐる潟の葦　熊谷國男
こゑ残し白鳥一家潟を翔つ　全
白鳥の残映胸に盃を挙ぐ　大手明男

―　琥珀会新潟吟行　十二月　―

初詣で産土神（うぶすながみ）へ些（ち）と甘え　盛雄
添え書きの一筆映えし賀状かな　全
凍る町座り続ける少女かな　健介
反省はさて措き明日へ日記買う　全
凍る夜はシナトラかけて火酒呷り　紀久男
春団治逝き冥土に四人の初笑　全

―　きさらぎ句会　一月　―

嗚呼ここに日の下開山明の春　盛雄
両国に遅咲きの花寒牡丹　全
曼荼羅や迷路の中に春の笑み　正明
三回もあいこが続き春麗らら　全
存分に傘寿の初日浴びにけり　允章
ひそやかに雪積む音やひとり酌む　全
松が枝をはなれて泛かぶ寒満月　全
香り立つ柚子湯今年は一人きり　千恵
小鳥鳴く小春日和の遊歩道　全
初場所に夢の叶いて賜杯抱く　全
常（ただ）ならぬ訃報舞込む年始め　紀久男

四　頂戴した年賀状より抄出

草田男にひたすら浸かり去年今年　弘子
地震ふれば良寛想う春傘寿　龍平
初詣段差安心プラタモリ　全
齢など蹴飛ばさんかな去年今年　健介
さあ朝御飯白鳥家族舞ひ上がる　允章
おろそかになりし句作り年の暮　くに子
ポンコツの身を庇ひつつ去年今年　無聞齋
あと二十年は生きるぞ傘寿の春　全
しぐるるや友を偲びて茶碗酒　小林光一
納沙布や島影薄し雪催　堂哉
冬ざれや波も立てずに鯉わたる　横山義雄
今日だけはトランプ忘れ歌留多追ひ　全
青き踏む亡き父の靴大きかり　伊奈義兼
潟染めて一本松の初日かな　熊谷國男
初暦企業戦士の日は夢か　奥西邦夫
子宝と交す盃去年今年　全
相応しく老いしかと問ふ初鏡　全
譲葉（ゆずりは）やデジタルの世に栄あれ
いろいろの御縁とお陰老の春　全

五　孤舟さん「俳句」一月号に「心に触れる新年の季語」と題して「小正月」と「歌留多」等について寄稿されておられます。　希望者にコピーを進呈します。